

# 心的イメージの可視化プロセスと表現

久保村 里正\*

## Studies on the Visualization Process of a Mental Image and the Expression

Risei KUBOMURA

**要旨** 基礎造形教育法は教員の質や学生の資質による教育効果のムラを低減する教育法であるが、課題によっては学生の表現志向の影響で教育効果に差が発生する場合がある。学生の表現志向は「具象的表現」と「抽象的表現」があるが、学生がどの様にして、その様な表現に至ったかというプロセスについては課題が残った。そこで本研究では久保村が継続的に研究を進めてきた基礎造形教育法を用いた授業の改善を視野に入れた、表現の発生プロセスについて調査を行った。調査方法は質問紙法とし、動物の記憶画を描かせるとともに、その動物に対する印象（イメージ語）を自由記述法で簡潔に書かせ、それぞれの動物に対する心的イメージが、どの様に記憶画として表現・可視化されるのかを分析した。調査の結果、以下のことが明らかになった。①ライオン、ゾウ、クジラのように全体的にイメージ語が統一、固定化されているものは忠実に描かれる傾向がある。②比較的、絵が上手い2群の中で、写実的表現群の作品はイメージ語と図像の関係が強く表れるが、キャラクター的表現群は関係性が薄い表現となっている。③視覚化のメカニズムは、心的イメージから視覚化を行うのではなく、ビジュアルイメージから直接的に視覚化される傾向が強い。

キーワード：基礎造形 造形要素 心的イメージ 視覚イメージ 具象・抽象 表現志向

### はじめに

本研究は久保村が継続的に進めてきた基礎造形教育法<sup>1)</sup>を用いた授業の改善を目的とする研究の一環である。

先稿「基礎造形教育法における表現志向の影響」<sup>2)</sup>および「基礎造形教育法における題材選定に対する嗜好と教育効果」<sup>3)</sup>では、主に基礎造形教育法における授業で発生する表現志向の差異について調査を行った。その結果、学生の表現志向は大きく具象的表現と抽象的表現に分けることが可能であり、その学生の表現志向と作品の完成度に、関連性のあることが分かった。しかし、表現志向の発現と学生がどの様にして、その様な表現に至ったかというプロセスについては課題が残った。

### I 研究背景と目的

一般的な制作のプロセスを考えた場合、発想（イメージ）からエスキースの過程を経て、作品の構想を固めるという大きな流れは、現象として捉えることができるが、頭の中の活動は目に見えないため、作品化された表現からしか作家の発想を推測することしかできない。しかし、全ての作品の表現が、作者のイメージの延長線上にあるものかという点、そういう訳ではないだろう。イメージが構想を経て表現に至る過程で、全く異質な表現に変容することは珍しくなく、その場合には、視覚化された作品の表現から元々の作者のイメージを読み取ることは非常に困難となる。

目に見えない頭の中のイメージは、作品を制作する上で非情に重要なものであるにも関わらず、捉えにくく、言葉で説明することも困難である。そういう意味ではイメージの取り扱い難さが、造

\*くぼむら りせい 文教大学教育学部学校教育課程美術専修

形教育を難しくしている要因の1つだといえる。

## 1 造形におけるイメージ

諸説色々あるものの、世界で最初に造形教育を構造的に示し、組織的に行ったのは1919年にヴァイマル共和国に設立された「国立バウハウス・ヴァイマル」だとする考えが有力である。バウハウスにおいてイメージは発想の教育として、主に予備課程において取り扱われていた。バウハウスにおける予備課程の教育は、当初、構成教育・基礎造形として高等専門教育で行われてきたが、次第に広がりを見せ、小中学校における美術教育でも一部で取り入れられるようになった。しかし美術教育の歴史を鑑みてみると、必ずしも基礎造形が素直に受容された訳ではないだろう。これは「美術の教育」と「美術を通しての教育」の対立とも関係しており今日でも教育内容の専門的高度化の象徴ともいえる基礎造形教育に対する反発は少なくないのが現状である。しかし、このような状況の中、2008年（平成20年）3月に学習指導要領が改定において、基礎造形教育を学校教育の中に取り入れる動きが表れた。

## 2 学習指導要領におけるイメージ

### 1) ゆとり教育の変遷

2008年（平成20年）3月に学習指導要領が改定され、平成21年度の移行期を経て、平成23年度から全面実施となった。1989年告示の学習指導要領から始まった所謂「ゆとり教育」は、1998年の学習指導要領でも受け継がれ、「生きる力」の育成を目的に、総合的な学習の時間、完全学校週5日制などが実施された。

しかし2004年、国連経済協力開発機構(OECD)の「生徒の学習到達度調査」(PISA2003)<sup>4)</sup>によって、日本の生徒の順位が一部で下がった事が発表されると、「ゆとり教育」への批判が高まり、文部科学省よる全国統一学力テストの実施活など、教育内容の高度化が進められるようになった。このPISA2003の調査に関し

ては、神原敬夫<sup>5)</sup>が「OECD生徒の学習到達度調査(PISA2003)-その批判的検討-」<sup>6)</sup>で、批判しているように、「学力の国際比較における条件の不均衡」や、「生徒の学力の実態を反映していない」という問題点があり、全てを肯定できる内容ではないだろう。しかし『調査報告「学力低下」の実態』では次のように、日本の教育力の低下は事実であるとしており、学力低下は否定できない事実だと言って良いだろう。

今回の調査の基本的な分析から浮かび上がってくる事実は、小学生、中学生の基礎学力の低下である。しかも、学力のちらばりが大きくなっていること、塾によって学習の補充を得られない子どもたちの間で学力の低下が一段と進んでいることは、出題された内容が、基本的なものに限定されていただけに、見過ごすことのできない事実である<sup>7)</sup>。

またゆとり教育への批判は、和田秀樹・著『学力崩壊—「ゆとり教育」が子どもをダメにした』<sup>8)</sup>や、桜井よしこ・宮川俊彦・著『ゆとり教育が日本を滅ぼす』<sup>9)</sup>など論客によって広く社会にも浸透し、世論を形成していった。その結果、平成23年度の改訂では、ゆとり教育の象徴ともいえる「生きる力」をはぐくむことという理念は引き継ぎながらも、全体的にはゆとり教育から学力向上を指向するものとなったのである。

### 2) 美術教育における脱ゆとり

今回の指導要領では、現在の日本（世界）の状況を「知識基盤社会」と位置づけ、教育内容の高度化を目指している。このような状況の中、今回の図画工作科の改定では、①教科内容の整理。②教科目標としての「感性」。③〔共通事項〕の新設が行われた。

イメージについては、小学校学習指導要領で、〔第1学年及び第2学年〕「形や色などを基に、自分のイメージをもつこと。」<sup>10)</sup>、〔第3学年及び第4学年〕「形や色などの感じを基に、自分のイメージを持つこと。」<sup>11)</sup>、〔第5学年及び第6学年〕「形や色などの造形的な特徴を基に、自分のイメージ

を持つこと」<sup>12)</sup>と書かれている。また中学校学習指導要領でも、〔第1学年〕「形や色彩の特徴などを基に、対象のイメージを捉えること。」<sup>13)</sup>、〔第2学年及び第3学年〕「形や色彩の特徴などを基に、対象のイメージをとらえること。」<sup>14)</sup>と書かれており、イメージの取り扱いが図画工作だけではなく美術科も及んでいることが分かる。この様に美術教育では、〔共通事項〕の中で「イメージを持つこと」を基礎として取り扱っており、これはバウハウスのような高等専門教育における造形要素の扱いと同じである。

### 3 研究目的

この様に、美術教育および高等専門教育においてイメージが基礎造形の範疇に含まれることは前述の通りであり、イメージは造形要素と同等に基礎造形教育を構成する大きな領域である。しかし従来の基礎造形教育では、造形要素についての教育・研究は進められてきたものの、目に見えない頭の中のイメージは捉えにくく、言葉で説明することも困難なことから、疎かな部分となっていた。

そこで小論では、基礎造形教育法の表現志向の違いによって発生する教育ムラの解消に向けて、先ず第1段階として、イメージの可視化プロセスについて記憶画のテストによって調査し、作者の持つ内的イメージが、完成された作品に、どの様な影響を及ぼすのかを明らかにしたい。

## II 調査方法

作者の心的イメージ像は目に見えないため、視覚的に示すことは難しい。そこで今回の調査では、テスト形式で動物の記憶画と、その動物の対するイメージについて簡潔なイメージ語をできるだけ多くかかせ、その動物を描く過程を、描かれた記憶画とイメージ語との関わりから考察した。

調査は2003年から2008年までの計5年間、岐阜市立女子短期大学生活デザイン学科1年の学生

を対象に実施した。調査は質問紙法とし、学生に動物の名前が書かれた質問紙(図.1)を配布し、テスト形式で、その動物を持ち込み資料なしで、記憶のみによって描かせるという課題とした。また描いた動物に対するイメージを自由記述法で簡潔なイメージ語を簡潔に書かせ(イメージ語)、それぞれの動物に対する心的イメージが、どの様にイラストレーションとして表現・可視化されるのかを分析した。

(図.1) 調査用紙

今回の調査で描かせた動物は、ライオン、シマウマ、ゾウ、カバ、トラ、イルカ、にわとり、オオカミ、クジラ、パンダ、ワニ、チータ、ツバメ、ヒヨウ、犬、猫の計16種類である。調査にあげられた動物の選択にあたっては、被験者がその動物を知らないと、記憶画として描くことが不可能なため、多くの人にとって身近な動物、知名度の高い動物を中心に選択した。またオオカミと犬といったように、外見が比較的似ている動物を描かせることによって、心的イメージが、描き分けの表現に、どの様な形で影響を与えるのかを明らかにしようと試みた。

## III 調査結果と考察

以上の様な調査方法で5年に渡り調査を行い、計311件の調査結果が得られた。本章ではこれら

の調査の結果について、調査で描かれた図を用いながら述べるとともに、結果から推測されるイメージ語と動物の可視化された表現について、考察を進める。

### 1 各動物の傾向と分析

以下に各動物に関わる調査結果を述べる。記憶画に関しては、代表的な表現、興味深い表現を2点。イメージ語に関しては、50以上の回答が集約できたものをあげた。

今回の調査では、自由記述法で書かせたため、学生が書いた個々のイメージ語の形式、数などは、さまざまとなった。結果を取りまとめるにあたっては、イメージ語の形式が様々であったが、全体の傾向をはかるため、同義のイメージに関しては、同じものとして取り扱った。例えば、「でかい」「大きい」「巨大」という言葉あった場合は、同じものとして取り扱い、その中でも多数を占める言葉を選択、もしくは併記したものを、そのイメージの「語」とした。

#### ①ライオン

ライオンのイメージ語は、「百獣の王」、「強い」、「鋭いキバ」、「肉食」、「怖い」、「たてがみ」などの語が集まった。この中でも「百獣の王」に関しては特に多くの回答が集まり、その数は100名以上となった。中には「雄は怠け者」、「いつも寝ている」といった回答もあり、ライオンの別の一面をとらえている。

ライオンの記憶画は、写実的で実物の特徴をとらえられている絵が多く(図.2)、狩りをしている情景を描いたものもあった。

またライオンは、昔話、絵本、漫画、アニメーションなどでも多く登場することから、キャラクター的表現の<sup>15)</sup>ライオン(図.3)も多く、中には王冠を被ったライオンの表現もみられた。

描かれているライオンは、ほとんどが、たてがみを持った雄であり、雌が描かれているものは少数であった。また雌が描かれていても、その中の

大半は雄とペアで描かれており、たてがみがライオンのシンボルとなっているのが分かる。



図.2 写実的な表現



図.3 ややキャラクター的な表現

#### ②シマウマ

シマウマのイメージ語は、「逃げ足が速い」、「肉食」、「弱そう」、「ライオンに食べられる」、「しましま」、「結構強い」、「やさしい」、「たくましい」、「おもしろい」などの語が集まった。シマウマに関しては、特に集中して集まった語というものがなく、そのため分散し、イメージ語が多岐にわたった。

シマウマの記憶画は、縞は正確に描けていないもの、または描かないものが非常に多く、体型も馬の形をしていないものも少なくない。(図.4)(図.5)また口がない、描けていないものも多く、シマウマ以前に、馬を描けていないことが分かる。

キャラクター的表現で描かれたものも少なく、シマウマの特徴を出すために、群れで描かれているものもある。

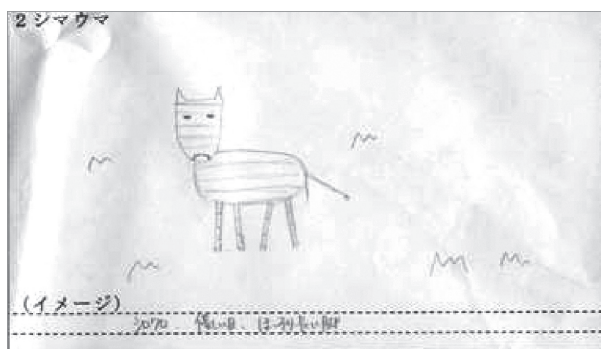


図.4 誤った模様の表現

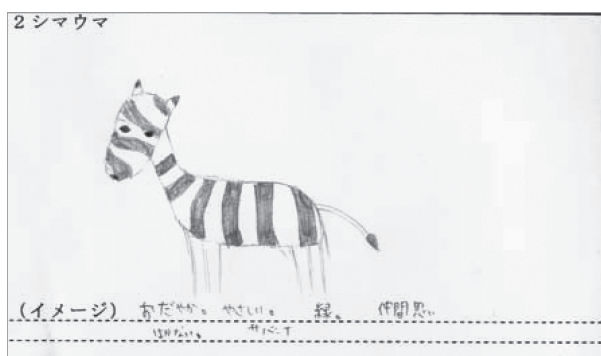


図.5 誤った模様の表現

③ゾウ

ゾウのイメージ語は、「大きい、巨大」、「長い鼻」、「大きな耳」、「おっとりしている」、「やさしい」、「つよい」、「重い」、「器用（芸をする）」、「水が好き」など、多岐にわたって回答が分散した。しかし「大きい、巨大」に関してはライオンと同様に100名以上の回答が集まっており、これはゾウに対する強固なイメージが形成されていることを示している。

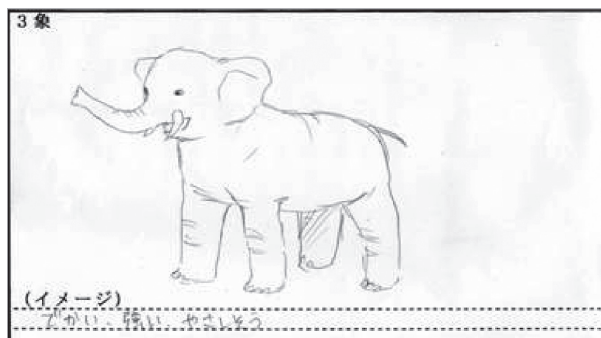


図.6 写実的な表現

ゾウの記憶画はライオンと同様に、実物の特徴を捉えられているものが多い。(図.6)これは強固なイメージがあることと無関係ではないだろう。この様なイメージのもと、キャラクター的な表現で描かれているものも多く、鼻から水を出している表現や、芸をしている表現(図.7)も多く見られる。



図.7 キャラクター的な表現

④カバ

カバのイメージ語は、「大きな口」、「のろい」、「怖い」、「かわいい」、「水の中にいる」、「大きい」、「なまけもの」、「目が小さい」など、多岐にわたって回答が分散した。しかし「大きな口」に関してはゾウと同様に100名以上の回答が集まっており、これはカバに対する強固なイメージが形成されていることを示している。

カバの記憶画は大きな口を開けている表現が多く、人間の様な口の表現も一部にみられた。また水に潜っているカバの絵(図.8)も多く、実物

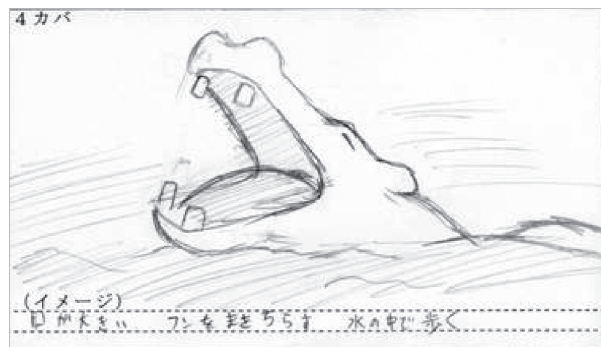


図.8 写実的な表現

の特徴を捉えられているものの、一部、不自然な表現も見られ、ゾウほどイメージ・表現が安定していない。このカバのように水中などの場の風景や、その他描き込まれたアイテムは、表現を強める上で効果的であるが、逆説的に言えば、動物単体では表現できない場合に補足的に描かれることも多い。この様なイメージのもと、キャラクター的な表現で描かれているものも多く(図.9)、ゾウと似た傾向を示している

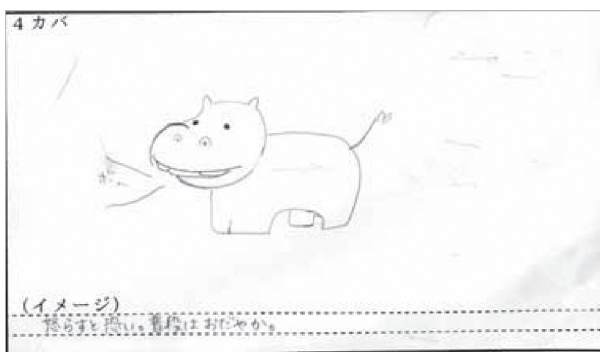


図.9 キャラクター的な表現

⑤トラ

トラのイメージ語は、「凶暴」、「怖い」、「強い」、「猫」、「縞模様」などの語が集まった。トラはライオンと同じ猫科の大型に肉食獣であるが、イメージ語は他の猫科の動物と被るため、全体として統一感に欠け、イメージ語全体の量も少なく、ライオンほどイメージ・表現が形成されていない。

トラの記憶画は、シマウマと同様に縞は正確に描けていないもの(図.10)が多く、描くのを放

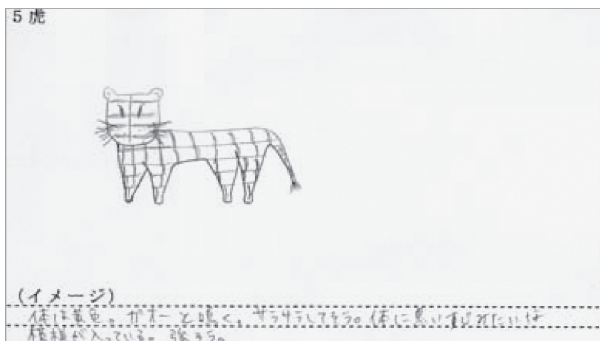


図.10 誤った模様の表現

棄したと思われる表現(図.11)もある。縞模様が描けないためか、写実的な表現のものは少なくなっており、結果として全体的にややキャラクター的な表現となっている。

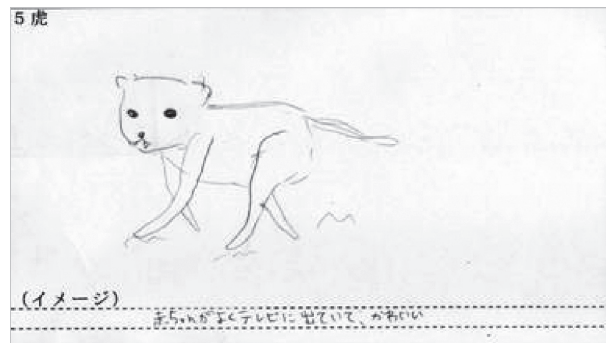


図.11 模様のない表現

⑥イルカ

イルカのイメージ語は、「頭がよい」、「人と友達」、「水族館で芸をする」、「かわいい」、「会話をする」、「つるつるしている」などの語が集まった。この中でも「頭がよい」には多くの回答が集まり100名以上となった。

イルカの記憶画は、写実的表現、イラスト的表現ともに多くあるが、中には写実的な表現に向かう以前に、形を良く認識できないものもあった。特に背びれ、胸びれ、尾びれなどのひれが描けていないものが多く(図.12)、中にはひれが全くないもの(図.13)もあった。

またイメージ語にあるような「頭がよい」といったことを視覚化することは難しいため、芸



図.12 形の誤った表現

(ショー) をしているといった表現によって、間接的に頭の良さを暗喩しているものが多くあった。



図.13 形の誤った表現

⑦にわとり

にわたりのイメージ語は、「くちばし」、「とさか」、「ひよこ」、「朝」、「うるさい」、「くさい」、「卵」、「コケッコー」、「気持ち悪い」などの語に分散した。これはニワトリのイメージが人によって大きく異なる事を示しており、中にはニワトリに対して、かなりネガティブなイメージを持っている人の存在が分かった。また、これらのネガティブなイメージは、作者が実際に体験したと思われる回答が多く、その分だけ「うるさい」、「くさい」など具体的なイメージ語となっている。

記憶画は多くは写実的に描かれているが、その殆どが立派な鶏冠を持つ雄鳥(図.14)である。これはライオンと同様で、鶏冠がニワトリのシンボルとなっていることがわかる。但し雄鳥なのだ

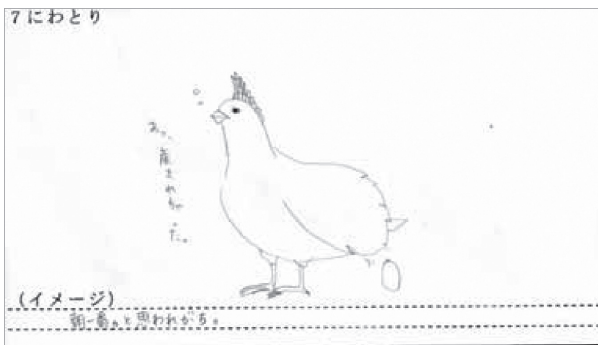


図.14 誤った模様の表現

がヒヨコや卵などを書き加える表現(図.15)も多く見られ、ライオンの「たてがみ」ほど、鶏冠に対する認識は高くないことがわかる。また作品の一割程度で、4本足のニワトリの絵(図.48)が発生しており、身近な存在ではあるものの、ライオンのような強いイメージが確立していない事がわかる。

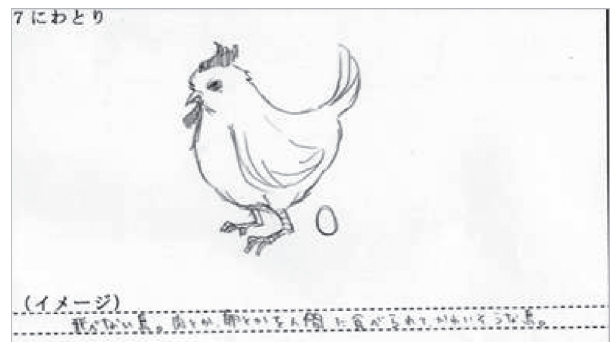


図.15 写実的な表現

⑧オオカミ

オオカミのイメージ語は、「集団」、「怖い」、「キバ」、「遠吠え」、「犬に似ている」、「肉食」、「月」、「ふさふさ」、「ごわごわ」、「黒っぽい」、「灰色」などの語に分散した。

記憶画はイメージ語に準じた表現が、比較的多く反映されている。写実的な表現(図.16)に関しては、身近な動物ではないものの、犬と似ているため、比較的、忠実に描かれており、犬に比べ、「耳が立たせる」、「キバを描く」、「体毛をフサフサにする」などを描くことによって、「怖い」イ



図.16 写実的な表現

メージを表現し、犬との描き分けがなされている。またキャラクター的な表現（図.17）が多く、「月」などの背景が描き込まれているものも少なくない。



図.17 キャラクター的な表現

⑨クジラ

クジラのイメージ語は、「大きい」、「潮を吹く」、「噴水」、「やさしい」、「おだやか」などの語が集まった。この中でも「大きい」に関しては100名以上回答が集まった。

記憶画については、その多くがイラスト的表現となっており、陰影をつけ写実風に描かれているもの（図.18）でも、実際のクジラとは大きく異なるものであった。またその表現へ定型化されており、マッコウクジラのようなお椀形のクジラが海から身体半分浮かべ、潮を吹いている絵が大半であった（図.19）。これはクジラの本物を目にするのが少なく、私たちの目にするクジラの多くが、このようなキャラクター化されたクジラだから

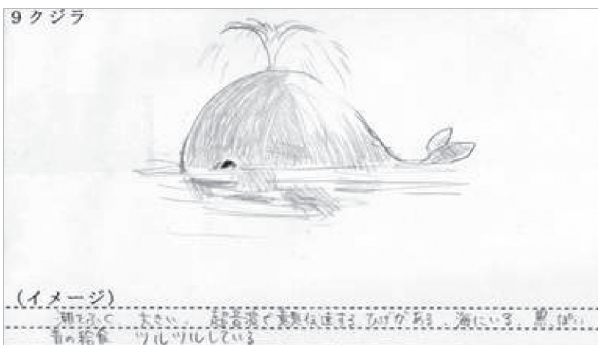


図.18 写実風の表現

だと思われる。

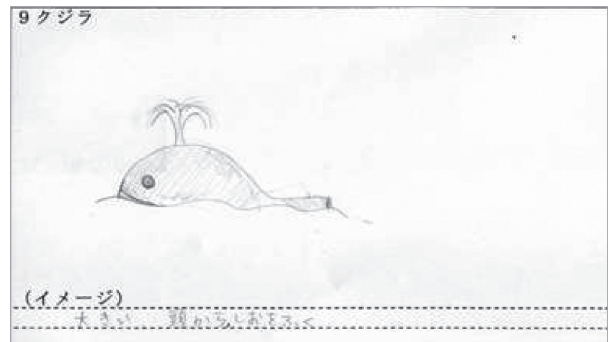


図.19 キャラクター的な表現

⑩パンダ

パンダのイメージ語は、「白黒」、「中国」、「笹」、「動きが鈍い」、「ふわふわ」、「コロコロ」などの語が集まった。全体的にイメージ語の分散は少なく、「白黒」には100名以上の回答が集まった。これはパンダの最大の特徴である模様がイメージとして形成されている事を示している。



図.20 ややキャラクター的な表現

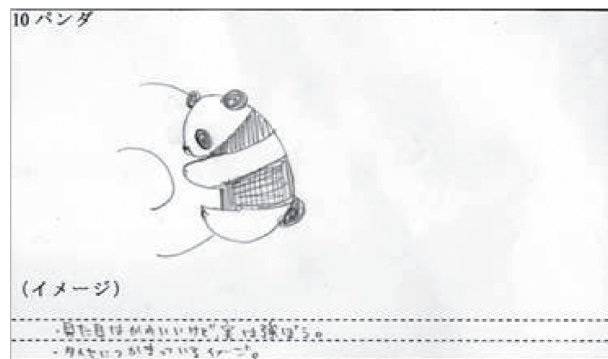


図.21 誤った模様の表現



一方で記憶画の方は、白黒で描かれている(図.20)もの、身体の模様、顔の模様が正確でないもの(図.21)が非常に多い。これはシマウマ、トラと同様の傾向であり、模様は記憶に残りイメージを形成しやすいが視覚イメージとしては残りにくいことを示している。

⑪ワニ

ワニのイメージ語は、「わに皮」、「ごつごつ、ざらざら」、「キバ、歯が鋭い」、「危険」、「ウロコ」、「手足が短い」、「気持ち悪い」などの語が集まった。全体的にイメージ語の統一感がなく、ワニ特有というべきイメージに欠けている。

記憶画に関しては、本物に忠実に描かれた写実的な表現(図.22)が少なく、足がない、足が多いといった表現もみられる。またカバに比べると陸上の絵が大半であり、キャラクター的表現も少ない。これは学生にとって生き物としてのワニはあまり身近ではなく、イメージが形成されてい



図.22 写実的な表現

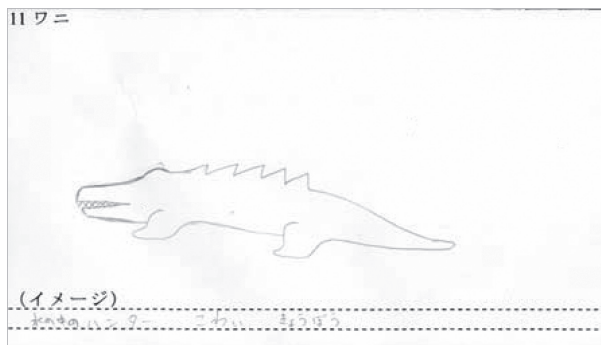


図.23 マーク化された表現

いためであり、加工された「わに皮」や、ブランドのマークのワニ(図.23)の方が、身近であることを示している。

⑫チータ

チータのイメージ語は、「足が速い」、「ヒョウと似ている」、「ライオンと似ている」、「密林、木の上」などの語が集まった。特に「足が速い」は殆どの方が書いており、チータの代表的なイメージとなっている。

一方、記憶画に関しては、「足が速い」というイメージから疾走している絵が大半で、トラやヒョウなどと比べても表現が定型化されている。また写実的に模様などを細かく描けていないものが大半で、マーク化された表現(図.24)はあるものの、キャラクター的表現は少ない。これはワニと同様に、チータ自体の視覚イメージ(図.25)が形成されていない事によるものだといえる。

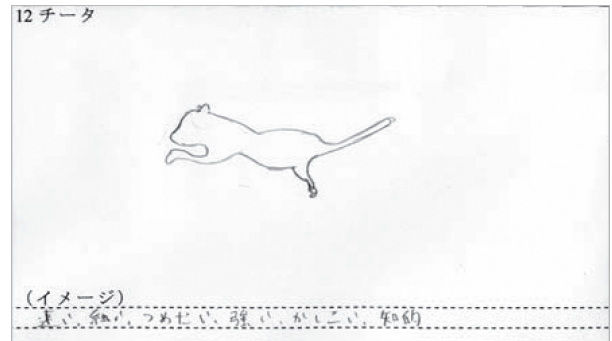


図.24 マーク化された表現

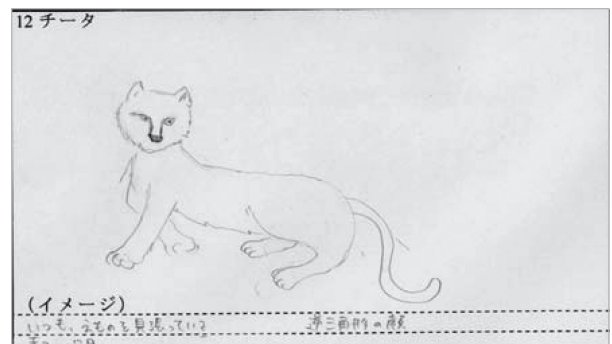


図.25 模様のないチータ

⑬ツバメ

ツバメは渡り鳥であり、一年中、日本にいる訳ではないが、都会のビルの軒にも巣を作るなど、日本人にとってなじみ深い鳥である。飛ぶのが素早いため、飛行しているツバメを見ることは難しいが、巣で子育てをしているツバメはじっくり見ることができる。そのためツバメのイメージ語は、「素早い」、「巣」、「子育て」、「雛」、「家族」、「渡り鳥」、「空」、「旅好き」などの語が集まった。

記憶画に関してはイメージ語を反映した、飛んでいる姿や、巣や子育てをしている絵(図.26)が多い。しかしツバメ自体の形は非常に曖昧で、視覚イメージが確立している訳ではないことが分かる。また4本足のニワトリの絵を描いた者の中の一部には、4本足のツバメの表現(図.27)が見受けられた。



図.26 子育てをしているツバメ



図.27 4本足のツバメ

⑭ヒョウ

ヒョウのイメージ語は、「ぶち」、「ヒョウ柄」、「ネコ科」、「虎に似ている」、「肉食」、「怖い」、「きれい」などの語が集まった。他の猫科の動物に比べ、イメージ語が少なく、心的イメージが固まっていないことが伺える。

記憶画に関しては、多くの場合、形は他の猫科の動物に倣うが、「ぶち」や「ヒョウ柄」によって描き分けられている。「ぶち」や「ヒョウ柄」は、シマウマやトラの縞模様と比べ、規則性がないため、あまり違和感なく、描かれている(図.28)。またチータの様に、マーク化された表現(図.29)も見受けられた。

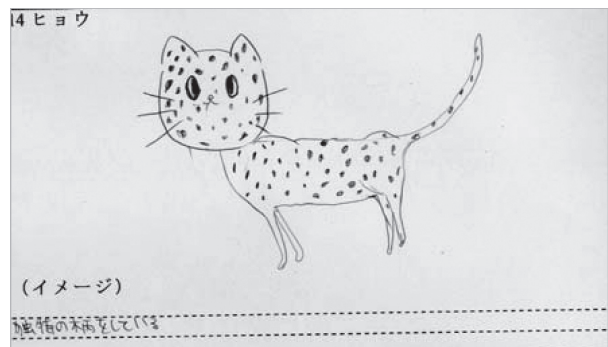


図.28 キャラクター的表現

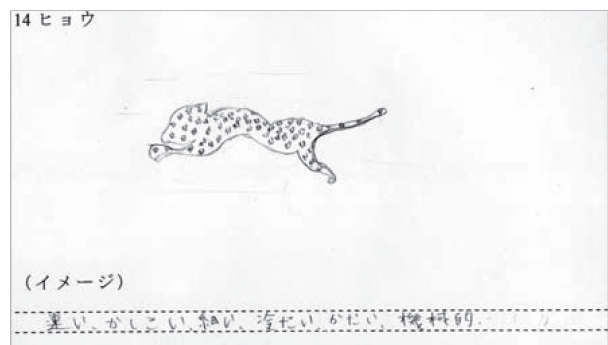


図.29 マーク化された表現

⑮犬

犬のイメージ語は、「人と友達」、「役立つ」、「ペット」、「従順」、「忠実」、「日本犬」、「柴犬」などの語が集まったが、回答は多様化しており分散し

た。イメージ語の多くは犬の外見，視覚的なものではなく，犬の性質，人間との関係について述べられており，犬が人間にとって，重要なパートナーであることが分かる回答であった。

記憶画に関しては，身近な動物であることから，写実的表現は実物に忠実に描かれており，キャラクター的表現も多く見られた。また今回の調査ではオオカミも同時に書かせたことから，オオカミとの描き分けをするために，犬の耳が垂れている表現が多くみられた。（図.30）（図.31）

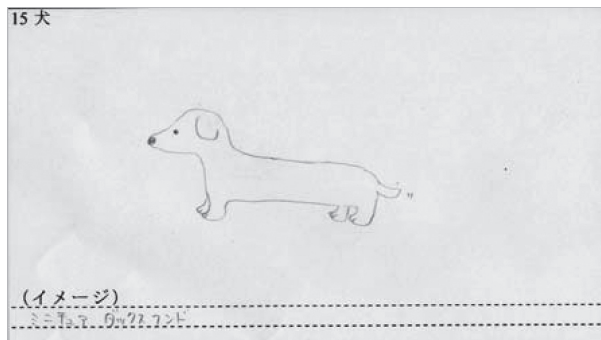


図.30 耳の垂れている表現

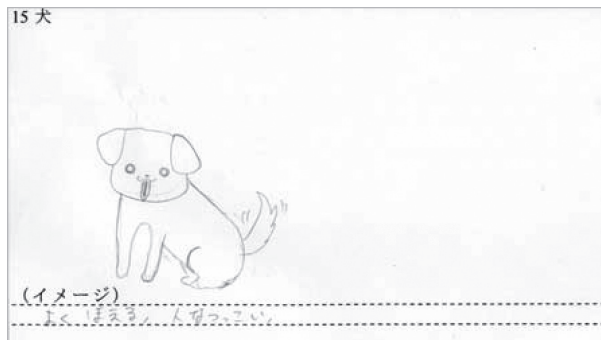


図.31 耳の垂れている表現

#### ⑩猫

猫のイメージ語は，「自由・人になつかない」，「目が光る」，「ペット」，「野良」，「気取っている・わがまま」，「丸くなる・寝ている」，「夜」，「可愛い」，「ネズミ」などの語が集まったが，犬と同様に回答は多様化しており分散した。イメージ語は犬ほどではないものの，人間との関係について書かれているものが見受けられた，

記憶画に関しては，表現が多様化しているものの，日常生活の中でも実物をよく目にする身近な動物であるため，写実的表現，キャラクター的表現ともに，猫だと識別できる描き方（図.32）がされている。またイメージ語との関わりからも分かるように，寝ている表現（図.33）が，いくつか見られた。

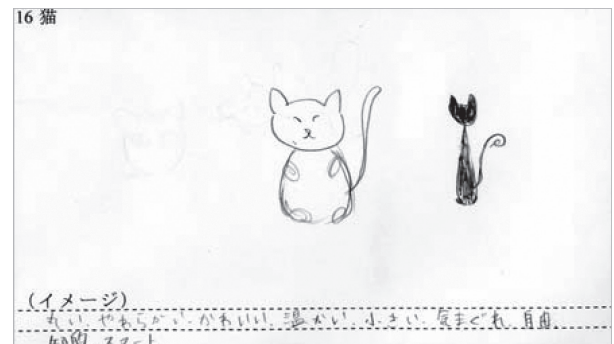


図.32 イラスト的表現

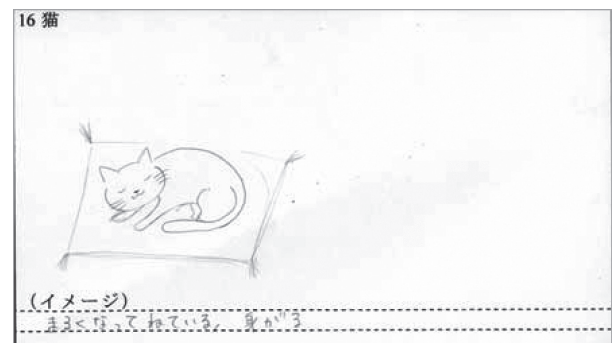


図.33 寝ている猫

以上，調査によって明らかとなった，各動物に対してのイメージ語，記憶画の結果と考察を述べてきた。次項では全動物を通しての結果と考察を行う。

## 2 表現の傾向と分析

今回の調査で描かせた記憶画は，1人あたり16種類の動物となっている。人によっては，個々の動物によって描き方が変わる場合もあるが，多くの場合は，全ての動物を同じ様な表現で描いていた。調査全体を分析すると，描かれた表現には傾

向があり、①写実的表現群、②キャラクター的表現群、③生硬表現群、④拙劣表現群の4つに分類した。そこで本項では、個々の動物に描かれた表現の傾向ではなく、一人一人が描いた表現の傾向について述べる。

### 1) 写実的表現群

写実的表現は写生のように実物の動物を忠実に描こうとするもので、写実的表現の中でも差があるものの、陰影などをつけることによって立体感やテクスチャを表現するなど、概ね技術的レベルは高い。

基本的に写実指向ではあるが、記憶画であるため、記憶が曖昧なものに関しては、自然な形で表現が省略される、または障害物などで隠されるた

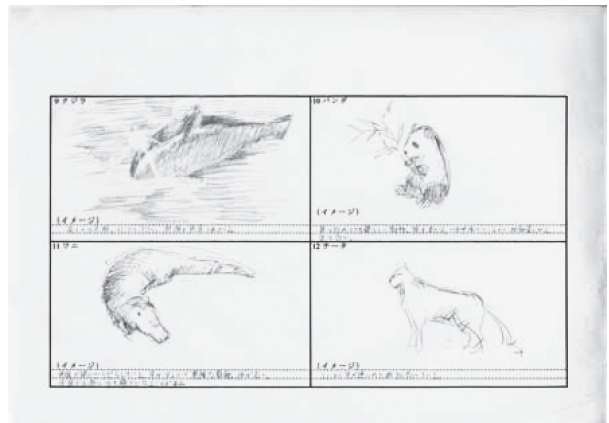


図.36 写実的表現

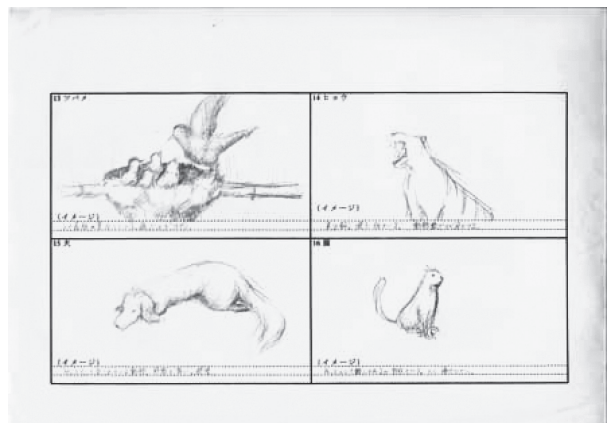


図.37 写実的表現

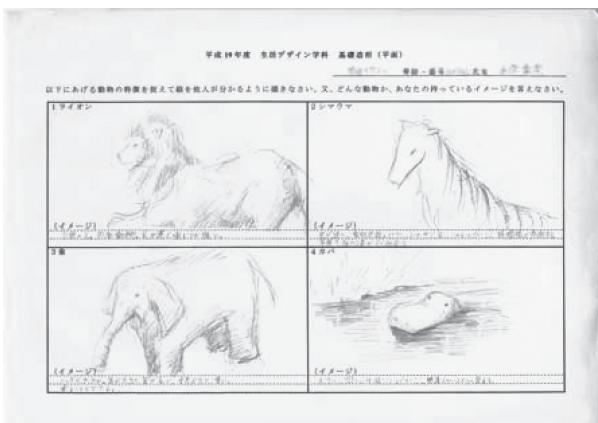


図.34 写実的表現

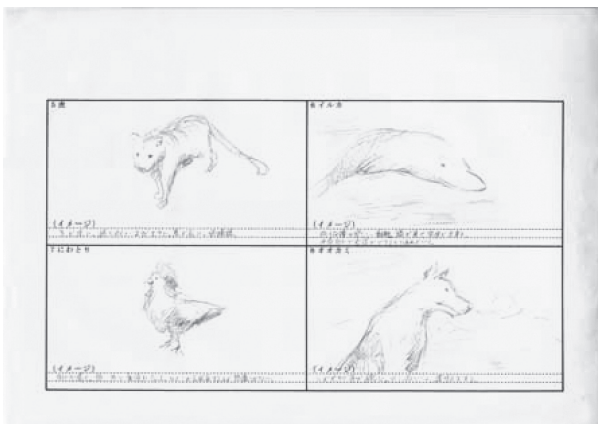


図.35 写実的表現

めに、違和感は少ない。(図.34)(図.35)(図.36)(図.37)

イメージ語との関係については、写実表現は実物を忠実に描くため、イメージ語によって特に表現を変えることはないが、イメージ語の示す形状的特徴は、うまくとらえている。

### 2) キャラクター的表現群

キャラクター的表現は、本物の動物を忠実に描くのではなく、動物のイメージによって動物を簡略化、デフォルメする表現である。デフォルメの仕方は、作者の個性、表現傾向に左右される部分が大きく、その場合にはどの様な動物であっても表現は似た様式をとることが多い。

例えば、(図.38)(図.39)(図.40)は同じ作者

の絵であるが、どの動物でも同じように、軽妙で可愛らしいタッチで描かれている。これは作者の表現方法が確立・定型化し、作者独自の作風となっているからである。それはキャラクター的表現の絵が比較的、絵として完成度が高いことから、作者が手慣れていることが分かる。

イメージ語と関係については、2つの傾向がある。1つめは表現が定型化しているため、どのような動物であっても同じ様な表現となってしまう場合である。そして2つめは、イメージ語の内容を表現に結びつけ、イメージ語で描かれた内的イメージを、視覚化させている場合である。例えば(図.41)は、トラの「竹やぶ」、ニワトリの「朝、うるさい」、イルカの「頭がいい、人気者」、オオカミの「夜、月」といったイメージを用いて視覚

化していることが分かる。

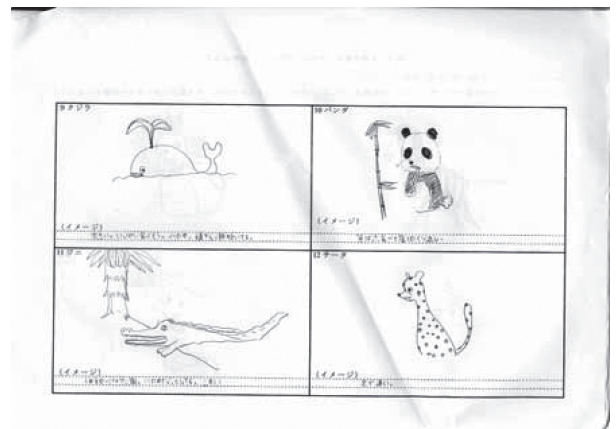


図.40 キャラクター的表現



図.38 キャラクター的表現

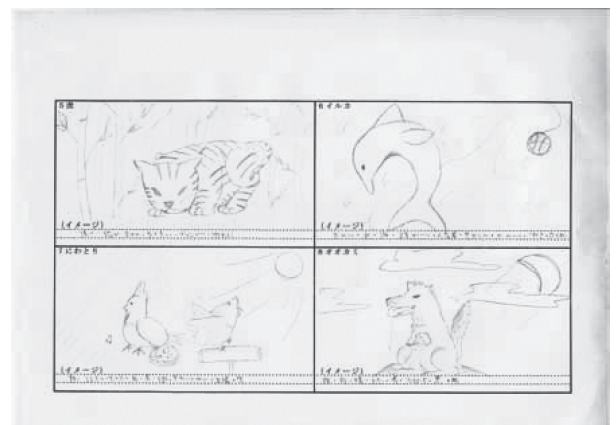


図.41 キャラクター的表現

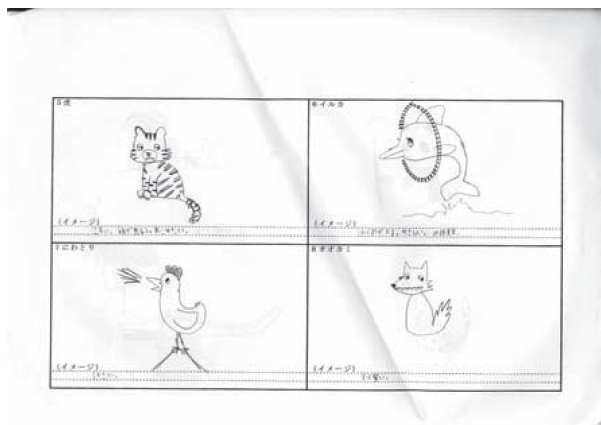


図.39 キャラクター的表現

### 3) 生硬表現群

写実的表現、キャラクター的表現の2つの表現傾向は、多少差があるものの概ね描く技術的能力は高いといえる。一方、生硬表現は写実的表現ほど忠実に描く能力が高くない表現、キャラクター的表現ほど定型化されていない表現で、写実的表現、キャラクター的表現へ変わっていく過程の表現だと考えられる。(図.42)(図.43)(図.44)(図.45)

この生硬表現は、技術的な能力を習得していく過程で写実的表現かキャラクター的表現のいずれかへ分化していくと考えられるが、現状では表現

が固まっていないため、描く過程で最も試行錯誤を行っている表現だといえる。どの様に描くかを試行錯誤するため、内的イメージを視覚化させる能力の影響をもっとも受けており、描画が不安定であるが、各動物に対する内的イメージが確立している動物ほど、イメージを視覚化が成功してい

ることがわかる。



図.42 生硬表現

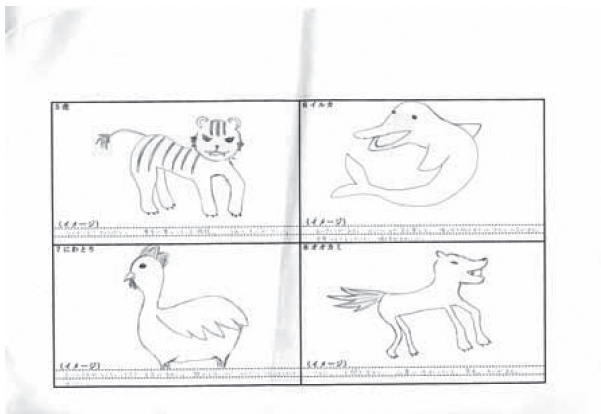


図.43 生硬表現

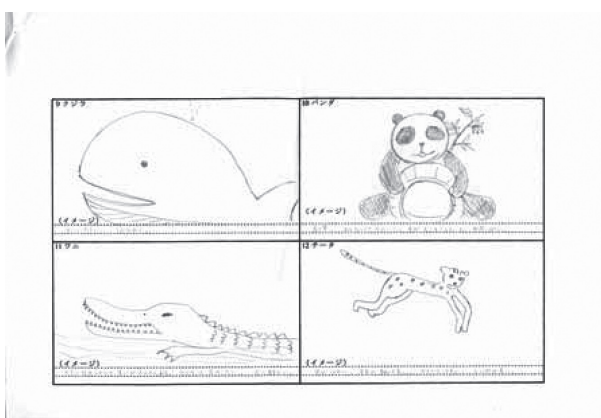


図.44 生硬表現

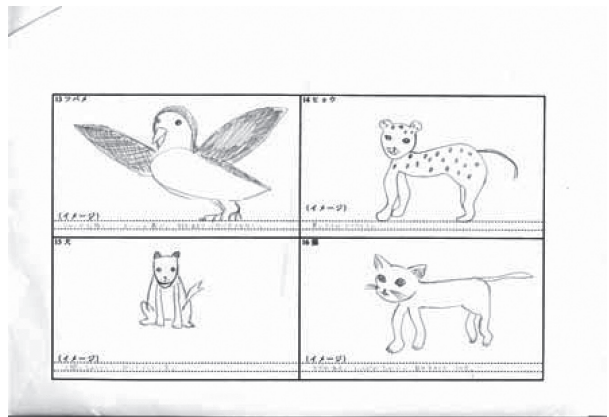


図.45 生硬表現

#### 4) 拙劣表現群

拙劣表現は描かれた動物が判別できないもの、特徴をとらえていないもの、大きく誤っているも

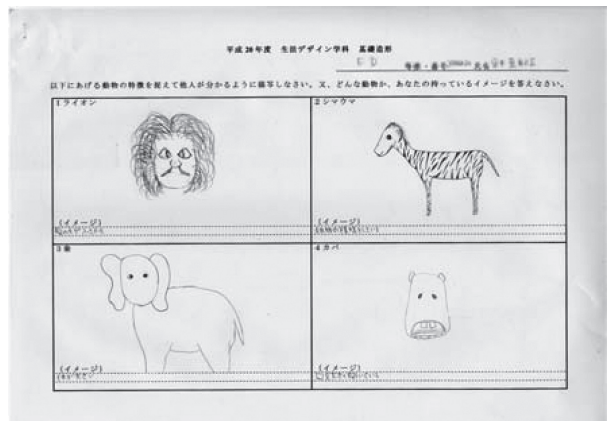


図.46 拙劣表現

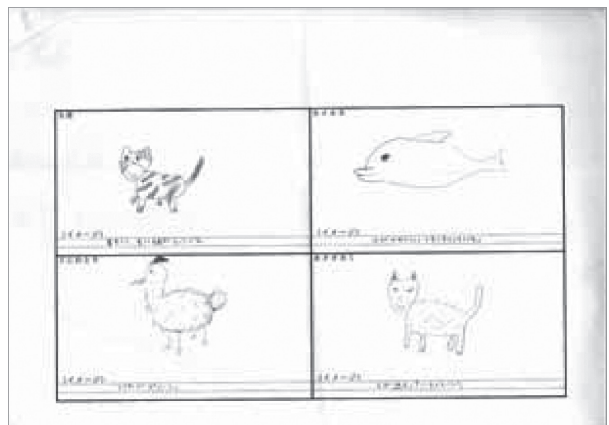


図.47 拙劣表現

のを指す。例えば(図.46)に描かれたゾウは鼻がなく、ゾウの最大の特徴をとらえられていない。(図.47)のニワトリは足が4本あり大きく誤った表現である。(図.47)のワニは大きく裂けた口がなく、ワニとは判別できない。(図.49)のツバメは翼があるものの、くちばしが無く、基本的な鳥の形をなしていない。

この様に拙劣表現は実際の動物と大きく異なった表現であり、基本的に絵を描くことが苦手な人が描いた絵だということが分かる。この様に絵が描けない理由は、いくつか考えられるが、①今回の絵は記憶画であるため、元々の動物をあまり知らない。②心的イメージから視覚イメージを形成することができなく、苦手である。③基本的に正確に絵を描く技術がない。等の理由が考え

られる。しかし拙劣表現で描く学生の全16種類の動物の絵をみても、知名度が高いライオン、ゾウなどでも同様に描けていないことから、元々の動物をあまり知らないということは考えにくいだろう。この表現の学生が絵を描くことを苦手としていることは絵も見ても間違いはないが、他の授業で行った写生のような場合には、もう少し描けていることから、単純に絵を描く能力というよりは、視覚イメージを形成することを苦手としているか、視覚イメージを絵として表現することを苦手としているように思われる。

### まとめ

今回の調査では、描かせた記憶画と書かせたイメージ語を比較し、両者の関連を分析した。結果的には写実的表現群とイラスト的表現群の一部に関連性が表れたものの、全体的にイメージ語と記憶画の表現の関連性は弱いものとなった。これは内的イメージの視覚化のメカニズムが、モチーフに対する心的イメージから視覚イメージを形成するのではなく、あらかじめ心的イメージと並列して存在する色や形を持った視覚的な情報として記憶された視覚イメージを、直接に作品の表現として描画するためだと考えられる。例えば誰もが良く知っているような、ライオン、ゾウ、クジラのように、多くの人々が内的イメージと視覚イメージとが統一、共有化されているモチーフの場合には、この様なプロセスに影響されることが少ないため、どの様な人が書いても比較的、安定した描画となると思われる。

無論、全ての表現が同様のプロセスを経ているのではないだろう。例えばキャラクター的表現群の中には、極端に関係性が強い表現と弱い表現が存在しており、それぞれプロセスが異なる。強い場合には、内的イメージと視覚イメージが統合された結果であり、弱い場合には、キャラクター的表現を志向する作者の中で、極端な表現の定型化が行われた結果だと思われる。

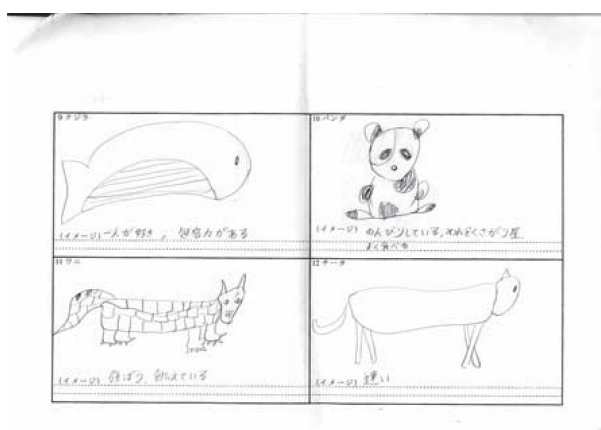


図.48 拙劣表現

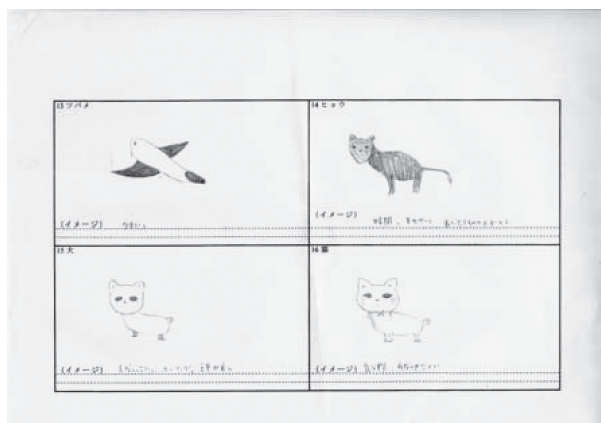


図.49 拙劣表現

この様な定型化された場合、作者はどのような動物を描いても同様の表現となる。つまり、この様な作者の表現パターンは、内的イメージからビジュアルイメージを形成して描くのではなく、予め用意されている記号化された自己の表現様式に、視覚イメージを当てはめているだけにすぎないのである。そういう意味では、心的イメージが表現様式にあたえる影響は少ないといえる。

## おわりに

以上、心的イメージの可視化プロセスについて、イメージ語と作品の表現の関連から考察を行った。小論では心的イメージの可視化プロセスに限定して研究を進めたため、心的イメージが、どの様に具象的表現志向と抽象的表現志向に結びつくかまでは論じていない。基礎造形教育法において、心的イメージの可視化プロセスをどの様に取り入れていくかについては、今後の研究課題としたい。

本研究は科学研費 基盤研究 (C) (80320951) の助成を受けたものである。

## 註

- 1) 久保村里正, 『造形要素の構造化に基づく基礎造形教育法に関する研究』, 名古屋大学大学院人間情報学研究科, 2008
- 2) 久保村里正, 「基礎造形教育法における表現志向の影響」, 『文教大学教育学部紀要 44 集』, 文教大学教育学部, 2010
- 3) 久保村里正, 小川直茂, 奥村和則, 「基礎造形教育法における題材選定に対する嗜好と教育効果」, 『文教大学教育学部紀要 45 集』, 文教大学教育学部, 2010
- 4) 「PISA (OECD 生徒の学習到達度調査) 2003 年調査」, [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/toukei/001/04120101.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/001/04120101.htm)
- 5) 元・大阪府立長尾高等学校長
- 6) 「OECD 生徒の学習到達度調査 (PISA2003) — その批判的検討—」, [http://homepage3.nifty.com/kkam12/PISA2003\(1\).pdf](http://homepage3.nifty.com/kkam12/PISA2003(1).pdf), 「OECD 生徒の学習到

- 達度調査 (PISA2003) (その 2) — その批判的検討—」, [http://homepage3.nifty.com/kkam12/PISA2003\(2\).pdf](http://homepage3.nifty.com/kkam12/PISA2003(2).pdf)
- 7) 荻谷剛彦, 志水宏吉, 清水睦美, 諸田裕子, 『調査報告「学力低下」の実態』, 岩波書店, p.32, 2002
- 8) 和田秀樹, 『学力崩壊—「ゆとり教育」が子どもをダメにした』, PHP 研究所, 2003
- 9) 桜井よしこ・宮川俊彦, 『ゆとり教育が日本を滅ぼす』, ワック, 2005
- 10) 文部科学省, 「小学校学習要領 第 2 章 第 7 節 図画工作」, 『小学校学習要領解説 図画工作編』, 日本文教出版, p.74, 2008
- 11) 前掲書, p.75
- 12) 前掲書, p.76
- 13) 文部科学省, 「中学校学習要領 第 2 章 第 6 節 美術」, 『中学校学習要領解説 美術編』, 日本文教出版, p.94, 2008
- 14) 前掲書, p.95
- 15) 小論では漫画的な簡略化, デフォルメを用いた描き方をされているイラストのことを「キャラクター的表現」と定義する。